

会 議 要 旨

- 1 会議名 平成20年度 第2回 認知症対策専門委員会
- 2 報告事項
高齢者見守りサポーター派遣事業について
国の動向について
- 3 議 題
「第二次北九州市高齢者支援計画」策定における課題等について
認知症実態調査について
軽度認知障害について
- 4 開催日時 平成20年8月19日(火) 18:00~20:00
- 5 開催場所 北九州市役所 91会議室
- 6 出席者
(1) 委員(50音順)〔6名〕
井田委員長、高田委員、田中委員、中村委員、村上委員、吉田委員
(2) 事務局(保健福祉局)〔7名〕
高齢者支援課長、在宅高齢者支援係長、認知症対策担当係長、
地域医療課長、精神保健福祉センター所長、技術支援担当係長
- 7 会議経過(議事・発言要旨)

報告事項

高齢者見守りサポーター派遣事業について
高齢者見守りサポーター派遣事業の現状と課題について報告。

主な報告内容

利用登録者数ならびに利用者数は平成16年度以降概ね増加している。利用者は80歳代、90歳代の女性が多く、要介護度1・2の方が大半である。派遣依頼の理由は様々であり、家族に急な用事ができたときや、リフレッシュのため、介護保険サービスの隙間をうめるためなどである。

課題としては、あくまでもボランティアであるため、活動の範囲に制限があることと、サポーターが減少傾向にあることなどである。

発言要旨

介護サービスとの住み分けの問題もあると思うが、もっと幅広い症状に対応できるような、専門性の高いサポーターの養成は難しいのか。

サービスの範囲と対象となる人についてのPRをしっかりとる必要がある。

今後の方向性を十分に検討するべきである。

(事務局回答)

ボランティアである以上、対応には限界があると考えている。

PRについてはチラシ等で行っている。

今後の方向性については専門委員会の意見も伺いながら検討して行きたい。

国の動向について

厚生労働省の「認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト」報告書を配布

主な説明内容

資料の提示のみであったため、省略

議題

「第二次北九州市高齢者支援計画」策定における課題等について
北九州市の認知症高齢者数などの現状と新計画策定にあたっての課題について説明。

主な説明内容

昨年9月末時点の認知症高齢者数(認知症高齢者の日常生活自立度 以上)は27,677人である。
今後も高齢化は進展し、認知症対策は課題の一つである。

認知症サポーター数は目標の1万人を超えているが、さらなる養成と、活動支援等が必要であると考える。

さらに、認知症の啓発・予防・早期発見・早期対応・適切なケア・家族支援・地域づくりまでを総合的かつ効果的に行える体制や仕組みづくりの推進が引続き必要であると考える。

発言要旨

認知症サポーターは5万人は必要であるとする。検討をして欲しい。

若い人は認知症の理解・知識以前に、高齢者への接し方が分からない。20代前後など、若い人に認知症や高齢者に興味を持ってもらうことが必要である。

講座を受けただけでは、なかなか接し方まで分からない。接触の場を持つことも必要である。

今後は、子どもや若い世代、現役世代や団塊の世代などすべての世代に広めていくことが必要である。

介護をする家族に認知症についての理解があれば、在宅で長く介護をすることも可能である。

また、認知症について学ぶ場に家族の交流の場があわせてあれば、精神面でのフォローにもつながる。

家族向けの介護教室と家族交流会を合体させることができれば、中身が深くなる。

早期発見・早期対応のためには、かかりつけ医、専門医それから、医療や介護に携わっている人以外の一般の方の気づきが必要である。全体で取り組まなくてはならない。

一般の方向けに早期発見のポイントをパンフレットなどでわかりやすく説明することができればいいと考える。

町中に交流の場がたくさんあれば、気づきにつながると思う。

(事務局回答)

認知症サポーターは企業に声かけをするなど、ターゲットを絞りつつ、拡大を目指している。家族の交流のために、家族交流会を開催している。今後もニーズや状況を判断しながらやり方を変えていく必要があると考えている。

認知症実態調査について

前回の委員会での意見をもとに再検討した調査案について説明。

主な説明内容

- 認知症対策の主な課題を解決するために優先的に取り組むべきこととして、
- ・かかりつけ医とものわすれ外来等との連携強化など、早期に適切な医療が提供できる体制作り
 - ・医療機関と介護サービス事業者や地域包括支援センター等との連携強化
 - ・認知症高齢者が在宅生活を送るために必要な支援や家族支援の充実
- などがあり、そこで、
- ・医療機関での認知症への対応状況
 - ・かかりつけ医とものわすれ外来等との連携状況
 - ・医療機関と介護サービス事業者や行政等との連携状況
 - ・在宅の認知症高齢者及びその家族の生活実態、望んでいる支援などにポイントを絞って調査を実施したいと考えている。

発言要旨

全体像をつかむという意味で概ねこの内容でいいと考える。ただ、「連携」の部分を見るために、ものわすれ外来などに、どのような患者がどのようなサービス等につながって行ったかを追跡するような詳細な調査を加えると具体的になってよい調査になると考える。

過去の調査との比較をして欲しい。悪い結果がでて、今後の反省材料になる。

(事務局回答)

調査方法・内容について、今回の意見をふまえて調整していく。

過去の調査との比較も可能な限り行う。

軽度認知障害について

現在の取組み状況について説明。

主な説明内容

軽度認知障害(MCI)に関する取組みとしては、「認知症予防講演会」と「認知症予防教室」を実施している。

また、認知症サポーター養成講座の中でMCIについての話をしたり、市発行の「認知症ハンドブック」の中に新にMCIについての項目を設けるなど、啓発を行っている。

現在「認知症予防教室」でファイブ・コグによるスクリーニングを実施しているが、参加者が少なく十分とは言えない現状である。そのため、今後、MCIの検査の拡大など、新たな取組みが必要と考えている。

発言要旨

ファイブ・コグを基本線として考えているのか、そこも含めて再検討するのか。

MC Iの方本人が講演会で話をされるのを聞いた。本人が話をする機会があれば、広がっていきやすいのではないかと。

スクリーニングをするときには、受け皿をしっかりとしておかなければならない。さらに、MC Iと診断された方がその後どうなったのか、追跡調査をすることも大切である。

MC Iの段階から治療を始めることは大事である。MC Iという考え方を広めていったほうが良い。しっかりやって欲しい。

(事務局回答)

現状ではファイブ・コグが最も適しているのではないかとということで採用している。他に良いスクリーニング方法があればそれについても伺いたい。

現在、MC Iの方については、かかりつけ医やものわすれ外来の受診をすすめている。

まず啓発をして、認知症予防について理解していただいたうえで、ファイブ・コグを実施する形を取りたい。受け皿としては、やはり専門医につなぐことが一番だと考えている。

その他

講演会のお知らせ、次回の開催についてなどのみのため、省略。